

荘厳な白鳥、ハムサの意義

ベン・ウィリアムス

白鳥は、何世紀にもわたり、インドの賢人や詩人たちの想像力をかき立ててきました。

サンスクリット語で「白鳥」は、ハムサです。ハムサの穏やかなしぐさに触発され、ヴェーダの預言者たちは、輝くばかりに美しく孤高の白鳥の姿を、青空を優しく動いていく太陽になぞらえました。それから何世紀もの後、ハムサが持つ神秘性と優雅さは、ウパニシャッドの悟りを開いた師たちにも影響を与えました。彼らは、白鳥と個人の魂は同じであると考えました。白鳥のさまざまな行動と本質的に一致するところに、この両者の関係性を見いだしたのです。ちょうど白鳥が毎年渡りをし、ある住みかから優雅に飛び立ち別の場所へと舞い降りるように、個人の魂は輪廻(りんね)転生の中で肉体から肉体へと移っていきます。

ハムサはまた、呼吸の象徴でもあります。この関連性は、インドの多くの神聖な教典に美しく念入りに描かれています。カシミール・シャイヴィズム哲学の教典の一つ、『ヴィジニャーナ・バイラヴァ』では、ハムサを、それぞれの呼吸という形で自ら絶え間なく繰り返すマントラであると表現しています。息を吸う時にハム、吐く時にサと繰り返します。ハムサは、シッダ・ヨーガの道のマントラの一つで、グルマーイは、ハムサとソーハムは同じであると教えています。その意味は、「私はそれである」です。従って、神聖な大いなる自己との結合 —— 「私はそれである」という気づき —— は、呼吸の流れとしてのハムサ・マントラに没頭するようになる者の中に自然に生じるのです。

白鳥はまた、水から牛乳を分離することができるという伝説によって重要な意味を持っています。これは、1羽のまばゆいばかりに美しい白鳥が、水からソーマ、すなわち「神々のネクター」を抽出したという、『ヤジュル・ヴェーダ』の古代の描写と関連があるようです。この能力によ

て白鳥は、偉大な存在の特徴であるヴィヴェーカ、すなわち「識別力」の典型的な象徴と見なされています。この精神的な識別力を養うことで、私たちは日常生活のあらゆる瞬間に大いなる自己のネクターを体験できるようになります。

「至高の白鳥」を意味するパラマハムサは、世俗的存在の一時的な流れの中で、普遍的かつ永遠の大いなる自己を識別できる悟りを開いた人のための別の名前です。シッダ・ヨーガのグルであるグルマーイは、ヴィヴェーカという、人を自由にする気づきを、真理の探究者に教えることに献身しているパラマハムサなのです。



© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。